

【ATC フィロソフィ⑦】

こんにちは、アークテックコム株式会社で、技術書類の作成と翻訳を行っています豊原 信です。

Tel : 050-6864-6201

Fax : 050-6864-6202

E-mail :

m.toyohara@arcteccom.jp

私心抑えて考える

今月は因果応報に関わる「百丈野狐」の紹介と、弊社のフィロソフィ（考え方）についてお話しします。

この宇宙と自然の真理の一つに因果応報の法則があると言われています。必ず物事には因があり、それに縁が作用して結果が生じている様に感じられます。例えば粃という因があり、それに水と土と太陽という縁が関わると、稲が育ちお米という果が得られます。また近代科学技術の理論も因果応報の法則に則っていると云えます。

このことを説いたお話が、仏教の百丈野狐にあります。

【百丈和尚が法話をされる時は、一人の老人がいて、常に衆僧に付き従って説法を聞いていました。衆僧が退出すれば老人も退出していましたが、あるとき老人だけが居残っていました。和尚はその老人に問うて『ワシの目の前の者は、一体何者だ』、老人は『はい、私は人間ではご

ざいません。その昔、迦葉仏(かしょうぶつ)がいらっしゃる頃、この山の住職でした。その頃、私が指導していた僧にこう問われたのです。『修行を完成させた人は、因果に落ちるや否や』。私はこう答えました『因果には落ちない』と、この答えのせいで五百生という長い間、野狐の身に墮してしまいました。和尚、お願いします。理解を促す目の覚めるような一句でもって、私を狐の身から脱出させてください。』

そして老人は『修行を完成させた人は、因果に落ちるや否や』と尋ねました。百丈和尚は『因果を味(くらま)さず』と答えました。老人はこの言葉ですぐさま悟り、礼拝して言った。『私はすでに野狐の体を脱して、山の裏におります。和尚に申し上げます。願わくは普通の僧侶の葬式に依(よ)らんことを』。

和尚は維那(いな)に命じて白槌を打たせ衆僧に知らしめました。『食後に亡き僧の葬式を執

り行う』と。衆僧は『変だな。皆元気だし涅槃堂(ねはんどう)にも病人はいない。なぜ葬式なのだ』と噂し合った。はたして食後になり、百丈和尚は衆僧を伴って山裏の岩の下に行き、杖で野狐の死体を引っ張り出し、それを火葬に付しました。

百丈和尚は晩の法話の際、このいきさつを皆に告げました。弟子の黄檗(おうばく)が『その老人は間違った一句を放ったため、五百生野狐に墮ちました。正解の一句を放ったなら、どうなりましたかなあ』と質問した。

和尚『こっちに来い。老人のために言ってやろう』。黄檗は近づくと、和尚に平手打ちを食らわせた。和尚は手を打ち笑って言った。『達磨大師は赤ひげだというのが、ここにもう一人、赤ひげ達磨大師がござったわい!』】

思い考えることで因を作り果を生じるということです。そのためには日常の刹那刹那にも、

私心を挟まないように有意注意しておく必要がありますね。

弊社のフィロソフィ（考え方）の続きです。

土俵の真ん中で相撲をとる

「土俵の真ん中で相撲をとる」とは、常に悲観的に計画して、リスクが発生しても対応が取れるように、日程を組んで余裕を持って仕事をする事です。そうすれば、万一予想しないトラブルが発生しても、まだ土俵際までには余裕があるため、十分な対応が可能となり、お客様に迷惑をお掛けすることはありません。

このように常に安全弁をおきながら、確実に仕事を進めていく必要があります。

我々は完璧な仕事をして納期には作品を納入することに命を懸けます。これは商売をする上で最も大切なお客様との信頼関係構築に繋がるからです。このように、納期の何日も前に必ず作品を完成させましょう。

前倒しの企画で常に完璧を目指す

何が起ころうとも大丈夫だと言えるくらいの余裕を持つ企画

（計画）を組むことです。楽観的に構想し、悲観的に計画し、楽観的に実践する。この悲観的に起こり得るすべてのリスクを考慮して、対策が打てるように企画することが重要です。もし、悲観的な計画が不十分でも余裕があれば対応ができます。つまり、「土俵の真ん中で相撲をとる」よう心がけねばなりません。

要は計画通りにやろう、完璧にやろう、とする場合は土俵の真ん中で相撲を取るような計画を組んで、実践することです。決して後悔しないように、感性的な悩みをしないようにします。日々立命を進めるにはとても大切な考え方です。

私心のない判断を行う

何かを決めようとするときに、少しでも私心が入れば判断はくもり、正しい判断ができずその結果は間違った方向へいってしまいます。

人はとにかく、自分の利益となる方に偏った考え方をしてしまいがちです。みんなが互いに相手への思いやりを忘れ、「私」というものをまっ先に出していくと、周囲の協力も得られず、仕事がスムーズに進んでいきません。また、そうした考え方は集団のモラルを低下させ、活動能力を鈍

らせることにもなります。

私たちは日常の仕事にあたって、自分さえよければという利己心を抑え、人間として正しいか、私心を差し挟んでいないかと、常に自問自答しながら物事を判断していかなければなりません。

端的に言う「自分というものを無にして物事を考える」、もっと極端に言えば、「自分を犠牲にして物事を考える」ということです。これは、思いやりの心を持つための入口の考え方です。

決断をする際には何度も、何度も自問する。『動機善なりや、私心なかりしか』と繰り返し唱え、自分を厳しく問い詰めていって、私心の無いことを確認します。利己的なエゴで判断をせず、客観的に人として正しいかどうかで判断をする。それがものごとを成功させていくためには、たいへん重要なことなのです。

ところが、ものを考えるときには必ずと言っていいくらい、私心、自分というものが入ってきてしまいます。それはなぜかというと、人間には自分を守ろうとする本能があるからです。

ものごとを考える場合、「さあ、今から考えましょう」と言って考えだす人はいないでしょう。普通、何かが起こればそこで直

感的に判断を下しているものです。その場合、人は本能という領域で判断を行っています。この本能は、自分のことだけを考えていますから、どうしても自分に都合のいい判断にならざるを得ないわけです。

そうではなく、何気なくものごとを判断するときにも、自分のことはいったん措いて考えるようにしなければなりません。もちろん、経営者であれば、自分の会社の利益を一番に考えるのは当然です。しかし、判断をするときには、自分の会社のことはいったん措いて考えてみるのです。

損をしたくない一心で自分に都合のいいようにばかり考え、相手の思惑と絡まり合っただけで解けなかったような問題が、自分と言うものを除いて考えたときに、相手も喜び、自分も喜びとい最高の解決法がスッと見つかることがあります。皆さんもぜひ、物事を判断するときには、私心のない判断を心がけてください。

私心のない判断をするといっても、具体的にどうすればいいのか。そのテクニックを教えましょう。何かが起こった瞬間、「どうしようか」と考えますが、結論を出す前に、「ちょっと待て」と一度深呼吸をしてみるのです。

そして、もう一人の自分に話し掛けます。『そういえば、「自分を無視して考えてみなさい」と言う考え方があるが、おまえどう思う?』と問いかけて、問題を第三者の立場で考えてみる。そうすれば、必ず最良の解が見つかるはずです。

トップに立つ者が私心に満たされ、間違った判断をすれば、会社の将来に大きな禍根を残すことになります。それだけに、このことは特に大切です。

まず、私心を抑えて他の人に利益を与えること、他の人の幸福を願い尽力するという思いやりの心で、戦略を考えましょう。極楽での釜揚げうどんの話を思い出してください。

※2025 年 06 月号に続きます。

豊原 信